

Actual Condition Correlated with Experience, Self-Management, Self Efficacy and Quality of Life : Findings from Postoperative Gastroenterological Cancer Patients Receiving Outpatient Chemotherapy

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/43637

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



平成 27 年 2 月 19 日

博士論文審査結果報告書

報告番号

学籍番号

06270220007

氏 名

北村 佳子

論文審査員

主 査(教授)

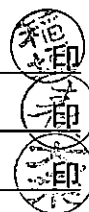
稲垣 美智子

副 査(教授)

表 志津子

副 査(教授)

大桑 麻由美



論文題名 外来化学療法を受ける消化器がん術後患者の症状体験、セルフマネジメント力、自己効力感、QOLの実態および関連

論文内容の要旨

本研究は、QOLが低いと推察されるがまだ明らかではない外来化学療法を受ける消化器がん術後患者のさまざまな実態を明らかにし、加えて、QOL向上のために、総合的に把握可能な“症状体験”、アセスメントから評価を患者自身で実施することを狙う“セルフマネジメント力”を把握する質問紙を作成し、その使用の可能性を探究した。方法は、まず①がん看護コアカリキュラムから抽出した6カテゴリー24項目を抽出して作成した“症状体験”の質問紙②UCSF症状マネジメントモデルより抽出した4カテゴリー10項目の“セルフマネジメント力”質問紙を作成した。その他の実態として、身体状況（栄養状態など9項目）、パフォーマンスステータス（6段階）、自己効力感（18項目尺度）、QOL（36項目尺度）を調査・測定した。対象は胃がん術後患者23名、大腸がん術後患者38名の計61名であった。

その結果、実態は身体状況ではアルブミン値の平均値は低かったその他の検査値には正常であった。一方症状体験は、70%が何らかの症状を体験しており、QOLは身体的および役割・社会的健康度が100点満点中40点程度と低い傾向にあった。またセルフマネジメント力はサポートを得る対処行動は80%程度と高かったが、行動の成果を評価する力が20%程度であり、その他の項目も50%以下の達成度であった。関連性については、症状体験があると答えた群においてセルフマネジメント力が自己効力感との相関（係数0.338）を認めた。以上の結果をもって、消化器がん手術を受けその後化学療法を受ける患者の療養上の実態が明らかとなり、QOL向上に本研究で作成した質問紙の活用と、セルフマネジメント項目がQOL向上に貢献する可能性を得ることができた。

審査結果の要旨

外来化学療法を受ける消化器がん術後患者の実態は不明であり、加えて消化器がん患者や化学療法を受ける患者のQOLは低くセルフケアができて自己効力感が上昇しないことが問題視されてきた。本研究は“症状体験”および“セルフマネジメント力”に着目しその活用によるケアの開発に寄与するものである。公開審査の対応も適切であり、学位請求者は本論文の論文審査及び最終試験の状況に基づき、博士（保健学）の学位を授与するに値すると評価する。